



近年のライフラインの整備の中で、特に地中の浅いところに敷設される極小口径管路の布設は、従来ではコスト面および施工の確実性といった観点から開削工法を選定していました。

しかしながら、本号の特集では、極小口径管路の非開削建設技術の十分な施工実績に加えて、施工時の線形精度確保、品質確保、および施工性向上といった記事が紹介されており、極小口径における非開削工法も十分適用可能なことが理解できました。

機械の小型化等の技術的な向上や、コスト面、工程面の改善を行うことにより、住環境や道路交通への影響が少ない極小口径管路における非開削建設技術の適用が今後ますます拡大されることに期待しています。

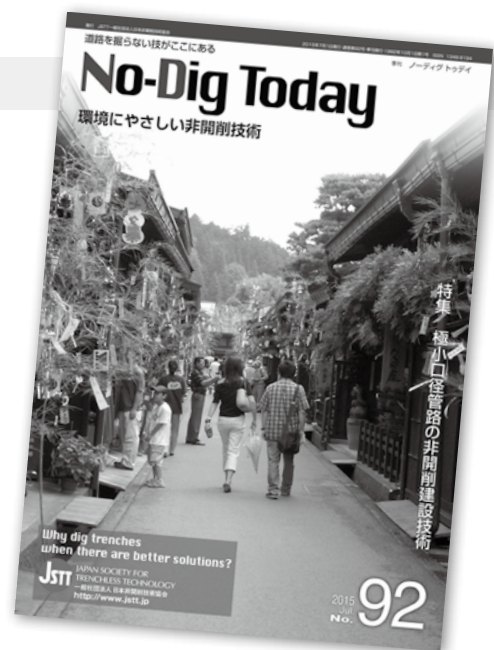


日本人の仕事は細かい、と言われる。安全第一で、細かく確認、丁寧な施工、些細な事も記録、課題は次に活かし、場合によってはやり直す。これは技を磨く為の日本人の性分でしょうか。そんなPDCAサイクルを自然に続けてきました。

92号は極小口径管路に焦点を当てた特集でしたが、このような性分を生かして発展してきた国内の非開削技術は今や世界が注目する手法だと感じます。先進国の現状が教訓となり社会インフラ

の「建設」の先にある「維持管理」に係る非開削のテクノロジーは、周辺施設への影響等開削に伴う様々な課題をクリアします。

弊社は主に下水道管路の清掃・調査・修繕・改築、及び付随するコンサルタント業務を行い、特に修繕・改築については「ライニング工法」を多く施工しています。私は事務職ですが本誌を読み、ライニング工法だけではなく、磨かれた非開削技術の総力結集こそがインフラの「安全・安心」を生むのだと改めて認識しました。



今年の夏は台風が多く、ニュースでもその都度冠水被害が報道されていました。現在の下水道管路の普及率は77%超ですが、高度成長期に急速整備した管路も耐用年数も50年になり、更なる下水道管路の再構築の必要性を強く感じました。

今回特集の「極小口径管路の非開削建設技術」でも多くの技術者の方が実験・施工を繰り返しインフラ整備に貢献されており、私も推進工事技術者のひとりとして非開削技術の向上に更に励みた

いと思いました。

それと、「知って得する 身近な・Science」の“大家さんと与太郎さん”、お二人の身近な事を例にしたやり取りを今回も拝見させて頂きました。

教科書嫌いな私ですが、次号も楽しみにしております。



第92号の特集は、『極小口径管路の非開削建設技術』であったため、下水道管路施設の計画・設計に携わるものとして、あまり触れる機会の少ない非開削工法の分野の特集であった。しかし、今後の下水道管路施設においては、小規模下水道事業に該当する未整備地区等に対して、普及拡大・コスト縮減等の観点から污水管最小管径であるφ150以下の非開削工法での施工機会が増えてくる可能性がある。そのため、今回の特集記事において得た知識を今後の下水道管路施設の計

画・設計の業務に活かしていけるように努力していきたいと感じた。

また、私自身においては、日本国内の業務のみを対象に行っているが、各協会等の技術投稿や海外イベント報告の記事を読むことにより、日本国内の業務だけではなく海外進出・国際貢献の重要性を再確認する良い機会となった。